

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：82603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00289

研究課題名(和文) ハンセン病と医学 - ハンセン病隔離政策と医学の関わりを明らかにする研究 -

研究課題名(英文) Leprosy and medicine-Research to clarify the relationship between leprosy isolation policy and medicine-

研究代表者

森 修一 (mori, shuichi)

国立感染症研究所・ハンセン病研究センター 感染制御部・主任研究官

研究者番号：40559522

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：近現代のハンセン病隔離政策の進展の要因を明らかにするために、世界のハンセン病対策と医学研究のために発行された「LEPRA」全巻(14巻)のデジタルデータベースを完成させ、解読と医学史研究を行った。国立感染症研究所内に近現代のハンセン病関連資料の収集・保存を行い、目録作成、資料のデジタル化を進展させた(現時点で約13000点)。ハンセン病問題の客観的理解への寄与を目的にWeb公開学術データベース「近現代ハンセン病資料アーカイブス」(<https://www.archhdjp.jp/>)と「甲田の裾電子図書室」(<https://www.archhdjp.jp/koudanosuso/>)の公開を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本のハンセン病政策を再評価するために、日本と世界のハンセン病関連資料(未公開資料、医学資料)を研究すると共に、これまで公開されていなかった資料を収集し、データベース化を行い公開し、今後の研究の進展に寄与すること、これらの資料を保存しハンセン病の歴史を未来へ継承する事を目的として研究を行った。今年度までの近現代のハンセン病資料のアーカイブスの進展により、今後、学術的に大きな貢献が可能なデータベースの完成が見えて来るとともに、ハンセン病の実態、ハンセン病政策の実際、隔離政策進展の要因、維持の要因などこれまで不明瞭であった事象の解明が大きく進展するものと思われる。

研究成果の概要(英文)：In order to clarify the factors behind the development of modern leprosy isolation policy, we have completed a digital database of the entire "LEPRA" (14 volumes) published for leprosy control and medical research around the world, and deciphered and researched medical history. Was done. We have collected and preserved modern and contemporary leprosy-related materials in the National Institute of Infectious Diseases, created catalogs, and made progress in digitizing the materials (currently about 13,000 items). Web public academic database "Modern Hansen's Disease Material Archives" (<https://www.archhdjp.jp/>) and "Koudanosuso Electronic Library" (<https://www.archhdjp.jp/koudanosuso/>) has been released for the purpose of contributing to the objective understanding of the Hansen's disease problem.

研究分野：医学史・科学史

キーワード：ハンセン病 隔離政策 ハンセン病医学 公衆衛生政策 学術データベース 社会啓発 近現代ハンセン病資料アーカイブス 甲田の裾電子図書室

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者の森は、日本のハンセン病政策の確立と維持の要因をハンセン病医学の進展過程と公衆衛生政策の関わりから追求してきた。また、その研究の過程で、犀川一夫（光田健輔の弟子、日本で最初にハンセン病の特効薬「プロミン」の治験を行い、台湾と沖縄にハンセン病の外來治療の道を開いた。元沖縄愛楽園園長、開放医療の先駆者）および石原重徳（光田健輔の弟子、元駿河療養所所長、同じく開放医療の先駆者）と親交を持ち、聞き書き調査に協力をいただく過程で、日本と世界のハンセン病政策の共通性と違いについて学び、これまで言われる単なる過失、医学の偏見とは違うハンセン病政策の実態を知るに至った。ハンセン病と医学の関わりに関する研究、WHOの解放医療政策に関する研究、世界の隔離政策に関する研究、日本の隔離政策下での開放医療の試みに関する研究、日本の隔離政策関係者への聞き取り調査によるその実態解明の研究などを行って来た。この過程で多くの資料の譲渡を受けると共に独自に資料を収集し、そのデータベース化を行って来た。その過程は以下の研究にある。

森 修一「ハンセン病と医学 - 隔離政策の提唱とその背景 - 」(『日本ハンセン病学会雑誌』[2006])では、ハンセン病隔離政策の提唱の背景を日本における近代医学の成立の過程とその主導者であった土肥慶蔵、北里柴三郎などの医学者の意見や当時のハンセン病医学（日本と世界、特に疫学、治療）と公衆衛生政策との関わりなどから考察した。森 修一「ハンセン病と医学 - 絶対隔離政策の成立と継続 - 」(『日本ハンセン病学会雑誌』[2007])では大正時代から昭和の始めにかけて高まる隔離政策確立への動きを日本の隔離政策推進の中心人物であった光田健輔や世界の隔離政策の研究などから考察した。森 修一「草津湯の沢ハンセン病自由療養地の研究」(『日本ハンセン病学会雑誌』[2004-2005])では、日本における隔離政策の進展と湯の沢部落（群馬県草津温泉にあったハンセン病患者村）の関わりを、帝国議会における自由療養地議論と光田健輔との関係から明らかにした。森 修一「ハンセン病の疫学」(『総説ハンセン病医学』東海大学出版会、[2007]所収)では、ハンセン病の疫学研究の歴史と隔離政策進展の関連を考察した。これらの過程で日本の隔離政策の特殊性と世界との共通性を認識し、根幹にある問題を明らかにすべく、ハンセン病政策と医学の関わりを検証に着手した。その過程で犀川一夫とともに、ヨーロッパを起原とした世界のハンセン病隔離対策の歴史を古代から現代までに亘り、医学と宗教の関わりを中心とした論点から検証し、犀川一夫、森 修一、石井則久『世界ハンセン病疫病史 - ヨーロッパを中心として - 』皓星社、2012年を著した。

2012年からは、これまで明らかとなっていない日本の隔離政策における入所者数・退所者数の動向を、日本ハンセン病学会会員の方々の方々の協力の下で独自に資料を収集し、1909年から2010年までの102年間の記録から検証し、そのデータをまとめた。本研究の結果から日本のハンセン病政策の総論と各論の問題が明らかとなった。また、日本における患者発生の動向とその分子疫学について研究し報告した(*J Dermatol Sci*67:192-4, 2012.)。2014年には日本近世のハンセン病の様相を明らかにすべく、「鍋かぶり葬」の骨化石から「らい菌」(ハンセン病の起原因菌)のDNAの検出を行い、近世におけるハンセン病患者への慣習的扱いなどについて考察した(*PLoS ONE*9 e88356, 2014)。その他、台湾のハンセン病解放医療の進展に関する研究、東北新生園における農業コロニー「東北農場」(療養所内の社会復帰訓練施設)などの研究を継続している。2013年からはこれらの資料に加え、犀川一夫資料、石原重徳資料、荒川 巖(元松丘保養園園長、開放医療の先駆者)資料の提供を受け、データベース「近現代ハンセン病資料アーカイブス」の構築を始めた(文科情報公開費用：課題番号15HP7007)。

2016年には日本人によるハンセン病救済の進展過程の研究 - 鈴蘭村事業、鈴蘭園事業に関する研究として、群馬県草津温泉で昭和の初めに展開された日本人医療関係者（三上千代、服部ケサ）による民間救済事業である「鈴蘭病院」、「鈴蘭村」が国立療養所栗生楽泉園の建設を促したこと、これらの民間事業は救済だけでなく公衆衛生対策として行われたこと、当時の患者のおかれた状況は非常に過酷であり、これらの事業をきっかけとして、日本人による救済が始まった事などを明らかにした。また、同じく、三上千代により宮城県で行われた「鈴蘭園」事業についての現地調査・研究を進展させた(森 修一、「草津温泉とハンセン病 日本人による救済の進展」『日本ハンセン病学会雑誌』[2016])

2018年には宗教と科学がハンセン病を克服してゆく過程を検証しながら、ハンセン病の歴史を明らかにする研究を行った(森 修一「ハンセン病対策の歴史と現状 日本と世界」『日本ハンセン病学会雑誌』[2018])、森 修一「世界のハンセン病政策に関する研究 ハワイにおける絶対隔離政策の変遷」(『日本ハンセン病学会雑誌』[2018])。

このような研究を行うことが、日本の隔離政策の進展、確立、維持の要因を明らかにすることにつながり、医学が強いては科学技術がその過程でどのような選択をするのか、どのような過ちを犯すのかを検証するための貴重な記録としたい。

## 2. 研究の目的

現在、日本のハンセン病政策は公衆衛生政策上の過失であったと評価されるが、その実態は未だ十分には検証されていない。その要因の一つがハンセン病の医学的側面の研究の不十分さ、日本と世界のハンセン病政策の比較研究の不足にある。本研究では日本のハンセン病政策を再評価するために、日本と世界のハンセン病関連資料（特に医学資料）を研究すると共に、これらの資料に加え、これまで公開されていなかった資料を収集し、データベース化を行い公開し、

今後の研究の進展に寄与すること、これらの資料を保存しハンセン病の歴史を未来へ語り継ぐことを目的とする。

### 3. 研究の方法

ハンセン病医学に関する国内外の文献資料の調査と系統解析を行う。併せて面談調査(国内)の候補者を選定し、聞き取り調査を行うと共に、関連する資料の受け入れ、収集を進め、データベース化し公開を始める。海外でのハンセン病医学の一次資料調査を行うと共に面談調査(国内・国外)と資料の受け入れ・収集を継続し、データベースの拡張と改善を進める。引き続き海外でのハンセン病医学の一次資料調査を続けながら、国内調査と海外調査を総合する比較研究を行う。同じく資料の受け入れ・収集を継続し、データベースの拡張と改善を進める。

### 4. 研究成果

#### (1) ハンセン病療養所職員 0B、ハンセン病対策関係者との対談調査

犀川珠子氏(犀川一夫夫人)からは1940年代の長島愛生園の実態、光田健輔および関係者の人物像、「癩予防法」以前の患者の置かれた状況、「癩予防法」(1931年)以降の療養所内の状況、1950年代の沖縄の隔離の実態、1960年からの台湾での犀川先生の開放医療への取り組み、1970年代からの沖縄での隔離政策の実態、患者の置かれた厳しい状況、外来診療の進展、などについて詳細な聞き取りを行った。この他、大平 馨先生(元多磨全生園園長)、小林 茂先生(元栗生楽泉園園長)などから聞き取り調査を行った。その過程で多くの資料の提供を受けた(犀川一夫、石原重徳、岡田誠太郎、湯浅 洋、荒川 巖、大平 馨、各先生の所有資料など)。

#### (2) 収集資料の目録作成とデジタル化

これまで収集した医学関連資料を中心に約13000件の資料の目録作成を行い、その内、約6000件の資料のデジタル化を終了させデータベースに登録した。LEPRA誌(1900年代初頭の国際ハンセン病医学ジャーナル、全14巻)、光田健輔「らいに関する論文集」(全5巻)、その他、光田健輔関係資料など多数の資料のデジタル化とデータベースへの登録を行った(「近現代ハンセン病資料アーカイブス」<https://archhdjp.jp/>)

#### (3) 日本の開放医療への試みに関する研究

日本の隔離政策は隔離一辺倒ではなく、戦前から長島愛生園を中心に軽快退所(治療して退所)が試みられ、年間100名ほどの社会復帰が行われていた。開放医療の試みは戦後にさらに進展し、療養所では1960年代には年間数百人規模の社会復帰があった。この状況の中、厚生省結核対策課0Bを中心に開放医療の制度化が立案され、療養所、厚生省、患者の三者により「社会復帰研究会」、「コロナー構想」、「らい研究協議会」、「軽快退所準則」策定、「東北農場」、「愛知外来」などの試みが行われたが、社会復帰者のおかれた厳しい状況、入所者のとどまりの場の必要性、入所者の高齢化などの諸要因から隔離政策が維持されたことを収集資料から研究を進展させた。

#### (4) ハンセン病療養所の自治会雑誌、機関紙のデジタル化、データベース化

松丘保養園自治会誌(機関紙でもある)「甲田の裾」1931年-2019年(90巻)のデジタル化、データベース化を行い、web上への公開を行った(「甲田の裾電子図書室」)<https://www.archhdjp.jp/koudanosuso/>)、「甲田の裾」のWeb公開を通じ、松丘保養園での入所者の暮らし、入所者と職員の関わり、数多くの文学作品の存在、療養所での出来事などを多くの方々に知っていただき、ハンセン病への理解の促進に寄与する事を目指した。

#### (5)戦後、沖縄のハンセン病の状況と日本の医療支援に関する研究

戦後、沖縄は米軍統治下でハンセン病対策が行われた、外来診療も始まったが、その実態は明らかとなっていない。また、厚生省により医療援助が行われ、ハンセン病医療の向上が行われ、1972年以降は本土並みの対策が行われた。この実態を明らかにするために資料の収集と研究、公開を行った(「近現代ハンセン病資料アーカイブス」<https://archhdjp.jp/>)。

#### (6)奄美群島における隔離の歴史の研究と現地のハンセン病啓発活動の支援

戦前、奄美大島を中心にハンセン病隔離政策が進展するがそのプロセスは本土や沖縄とは大きな違いがある。このプロセスを本土と沖縄の三者で比較することはハンセン病隔離政策の進展要因を明らかにするためにも重要である。奄美大島を中心に「奄美和光園」の元自治会長である森山一隆氏の協力を得てハンセン病隔離政策進展の要因を研究した。また、現地のハンセン病啓発組織である「ハンセン病文庫友の会」の歴史とその意義を研究すると共に学術的支援を行い、社会啓発の促進に務めた。

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 6 件)

森 修一、阿戸 学 「訂正再掲論文 国立ハンセン病療養所における入退所動向に関する研究 - 1909年から2010年の入退所者数調査から -」『日本ハンセン病学会雑誌』査読有、88、53-75、2019.

森 修一、阿戸 学「近現代ハンセン病資料アーカイブス」の公開と今後の展開 『日本ハンセン病学会雑誌』査読無し、89、13-18、2020.

森 修一、森山 一隆、岸田 松美、阿戸 学「ハンセン病文庫友の会」11年の活動の歴史とその意義について『日本ハンセン病学会雑誌』査読無し、89、19-23、2020.

森 修一、阿戸 学、近現代ハンセン病資料アーカイブス事業 - 「沖縄らい検診等援助計画報告書」資料の公開 - 『日本ハンセン病学会雑誌』査読無し、89、27-95、2020

森 修一、阿戸 学 近現代ハンセン病資料アーカイブス事業 「昭和42年度 沖縄らい検診など援助計画報告書」資料の公開『日本ハンセン病学会雑誌』査読無し、89、101-142、2021.

Yasuhisa Iwao , Shuichi Mori , Manabu Ato , Noboru Nakata, **Simultaneous Determination of Mycobacterium leprae Drug Resistance and Single-Nucleotide Polymorphism Genotype by Use of Nested Multiplex PCR with Amplicon Sequencing. Clin Microbiol. 2021 ep 20;59(10):e0081421.** 査読有

〔学会発表〕(計 1 件)

森 修一、「湯ノ沢部落と自由療養地議論の進展」、第94回日本ハンセン病学会総会・学術大会、岡山市、2021年6月

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

**ホームページ等**

近現代ハンセン病資料アーカイブス

<http://www.archhdjp.jp/>

ハンセン病政策と医学の関わりを医学史・科学的に明らかにし、新たな検証の論点を提示すると共に、これまで未公開の資料のデータベース化を行い、順次改善し、多くの研究者に役立つことが目標である。

甲田の裾電子図書室

<https://www.archhdjp.jp/koudanosuso/>

松丘保養園機関紙「甲田の裾」のWeb公開を通じ、松丘保養園での入所者の暮らし、入所者と職員の関わり、数多くの文学作品の存在、療養所での出来事などを多くの方々に知っていただき、ハンセン病への理解の促進に寄与する事を目指した。

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：廣野 喜幸

ローマ字氏名：**HIRONO Yoshiyuki**

所属研究機関名：東京大学

部局名：大学院情報学環・学際情報学府

職名：教授

研究者番号（8桁）：**90302819**

### (2) 連携研究者

連携研究者氏名：阿戸 学

ローマ字氏名：**ATO Manabu**

### (3)研究協力者

研究協力者氏名：森山一隆

ローマ字氏名：**KAZUTAKA Moriyama**

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

|   |                      |
|---|----------------------|
| 1. 著者名<br>Iwao Yasuhisa, Mori Shuichi, Ato Manabu, Nakata Noboru  | 4. 巻<br>59           |
| 2. 論文標題<br>Simultaneous Determination of Mycobacterium leprae Drug Resistance and Single-Nucleotide Polymorphism Genotype by Use of Nested Multiplex PCR with Amplicon Sequencing | 5. 発行年<br>2021年      |
| 3. 雑誌名<br>Journal of Clinical Microbiology  | 6. 最初と最後の頁<br>814-21 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.1128/JCM.00814-21  | 査読の有無<br>有           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)  | 国際共著<br>-            |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>森 修一、阿戸 学                              | 4. 巻<br>89          |
| 2. 論文標題<br>「近現代ハンセン病資料アーカイブス」の公開と今後の展開           | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>JAPANESE JOURNAL OF LEPROSY            | 6. 最初と最後の頁<br>13～18 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.5025/hansen.89.13 | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)           | 国際共著<br>-           |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>森 修一、森山 一隆、岸田 松美、阿戸 学                  | 4. 巻<br>89          |
| 2. 論文標題<br>「ハンセン病文庫友の会」11年の活動の歴史とその意義について        | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>JAPANESE JOURNAL OF LEPROSY            | 6. 最初と最後の頁<br>19～23 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.5025/hansen.89.19 | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)           | 国際共著<br>-           |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>森 修一、阿戸 学  | 4. 巻<br>89          |
| 2. 論文標題<br>近現代ハンセン病資料アーカイブス事業 - 「昭和42年度 沖縄らい検診等援助計画報告書」資料の公開 - | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>JAPANESE JOURNAL OF LEPROSY                          | 6. 最初と最後の頁<br>27～95 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.5025/hansen.89.27               | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)                         | 国際共著<br>-           |

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名<br>森 修一、阿戸 学                                   | 4. 巻<br>89              |
| 2. 論文標題<br>近現代ハンセン病資料アーカイブ事業 「沖縄らい検診など援助計画報告報告書」資料の公開 | 5. 発行年<br>2021年         |
| 3. 雑誌名<br>JAPANESE JOURNAL OF LEPROSY                 | 6. 最初と最後の頁<br>101 ~ 142 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.5025/hansen.89.101     | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)                 | 国際共著<br>-               |

|   |                      |
|---|----------------------|
| 1. 著者名<br>森 修一、阿戸 学、石井則久  | 4. 巻<br>88           |
| 2. 論文標題<br>国立ハンセン病療養所における入退所動向に関する研究 - 1909年から2010年の入退所者数調査から - | 5. 発行年<br>2019年      |
| 3. 雑誌名<br>日本ハンセン病学会雑誌   | 6. 最初と最後の頁<br>53 -75 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.5025/hansen.88.53                | 査読の有無<br>有           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている(また、その予定である)                           | 国際共著<br>-            |

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

|                             |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名<br>森 修一             |
| 2. 発表標題<br>湯ノ沢部落と自由療養地議論の進展 |
| 3. 学会等名<br>第94回日本ハンセン病学会総会  |
| 4. 発表年<br>2021年             |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

|  |
|--|
| 近現代ハンセン病資料アーカイブ<br><a href="https://www.archhdjp.jp/">https://www.archhdjp.jp/</a><br>近現代ハンセン病資料アーカイブ<br><a href="https://www.archhdjp.jp/">https://www.archhdjp.jp/</a> |
|--|

6. 研究組織

|           | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                         | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                         | 備考 |
|-----------|---|---|----|
| 研究<br>分担者 | 廣野 喜幸<br><br>(hirono yoshiyuki)<br><br>(90302819) | 東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・教授<br><br><br><br>(12601) |    |

|           | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                  | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                | 備考 |
|-----------|--|--------------------------------------|----|
| 研究<br>協力者 | 森山 一隆<br><br>(Moriyama Kazutaka)           | ハンセン病文庫友の会・会長                        |    |
| 連携<br>研究者 | 阿戸 学<br><br>(Ato Manabu)<br><br>(20392318) | 国立感染症研究所・感染制御部・部長<br><br><br>(82603) |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |